とを、ソ連強制抑留帰還者の血のにじむ声として記した。

これがよかったとしか言いようがない。合格するはずはないと思っていたのに、翌春早々であったか、採用通知をもらった。母の喜びはひとしおであった。

応召抑留手記

大阪府　いまい　げんじ
（今井　源治）

赤紙召集

「もしもし、おとうさん……召集の……赤紙が……来ましたよ……」息をつめた妻の電話に、あ、、と唾をのみ、

「よし、わかった」

と私は電話器を置いた。

そのとき姉の家にいた私は、その隣の従兄の弥太はんにもその朝、召集が来たことを聞いたばかりだった。

赤紙が舞い込んでから入隊まで、たった二日の余裕しか与えられていなかった。その二日間に、稼業の整理、身辺の整理、それはもう不眠不休の二日間であった。

夫婦が語らう暇もなく、千々に乱れる両親の心も知らず、キャーキャー騒ぐ幼い我が子たちの声にもキューンと胸がいたむ。

長男の孝は六歳半、国民学校一年生、長女の加奈子は満四歳、次女の睦子は一歳半、かしこい子だが、まだ歩けない。妻は妊娠中、そしてその母。私が戦死すれば、これが今生の別れなのだ。

明くれば一九四三年七月二十四日、大阪の夏で一番暑い天神祭の宵宮の日、私はスフの国民服に赤だすき、坊主頭に奉公袋をぶらさげて、二十三部隊の営門をくぐった。

炎天下の営庭で裸になって身体検査。なれぬ手つきで針を持ち、一つ星の襟章を軍服に縫いつければ、いよいよ陸軍二等兵。教練だ、駆足だ、軍歌演習だ、飯上げだ、清掃だ、点呼だ、なんだかんだ、何が何やら

汗みどろ、怒鳴られ、殴られ、無我夢中の一日が終わり、消灯ラッパが鳴りひびくと、汚れくたびれた五尺の寝台わらぶとん、これが我らの夢の床だ。兵営の塀越しに町の民家の灯りを見るのは辛かった。やがて私たちは旧満州へ送られた。

ソ連侵攻

「隊長はどこだ、隊長は……」

ふもとのほうから他隊の見習士官が駆け上がってきた。

そのころ、私たちは満州敦化付近の山中で、満人の勤労奉仕隊を使い、航空燃料のドラム缶を隠すための横穴を掘っていた。

見習士官が帰ったら、分遣隊長の中和田軍曹が「オイ、えらい事になったぞ、日ソ開戦やぞ」「えっ、ソ連と、いつ?……」「昨日からやそうな、えらいこっちゃ」

……すうっと谷底へ吸い込まれるような気がした。故国の妻子の俤が浮かんできた。翌朝、遠雷のような砲声が響いてきた。

八月十六日の朝だった。敦化の本部から鈴木老兵がやってきて大変なことを伝えた。昨日、重大放送があって、日本は降伏したというのだ。顔面から血の気がさっと引いていくのを感じた。

「日本が降伏? そんなアホなことが……」

「そらデマや、デマにもほどがある」

みんな土色になった顔を見合わせた。「八紘一宇」「神州不滅」、それらの文字がチカチカと脳裏に浮かび飛び去っていく。

しばし茫然自失の後、やっとだれかが言った。

「じゃ、俺たちはどないになるんでよ?」

「そらまだわからん、けど、内地へ帰るんと違うやろか?」「内地へ帰る!」

その一言にみんなハッとした顔つきになった。

肉親たちの顔が、どっと浮かんできた。みんな泣き笑いの表情に変わっていった。そして、みんなそわそわし始めた。

敗戦

私たちは山をおりて敦化の本隊に合流した。民家には一斉に青天白日旗がひるがえっていた。隊内はごっ

た返していた。

続々と前線から退ってきた敗走兵で兵舎はいっぱいになり、混乱していた。顔じゅう繃帯したのや、腕を吊った者もいる。

「戦うにも何にも、戦車には追われる、機銃掃射は食うで、命からがらだ」本隊の鳥井大尉などは命令受領とかでいち早く飛行機で南下したまま帰って来ないので、留守を預かる大西曹長も途方に暮れていた。

暴民に襲われた日本婦女子の話は聞くに忍びなかった。敦化の街の日満パルプの社宅で、ソ連兵の暴行を避けるため、婦人たちが集団自決を遂げたという悲劇……。

「明日は川向こうの原っぱに移動するのだ」

「じゃ、この兵舎も今夜が最後か」

「くそっ、残念！」

敗戦の現実に愕然とし、激しい憤り、不安、失意、さまざまな感情に内務班は騒然、酒が持ち込まれて混乱状態となってしまった。

「静かにしろ！」と怒鳴った週番下士官も、「殴れ！どつけ！」と殺気だった兵隊たちの権幕に恐れをなして退散。やけくその爆発は上官に向けられ、果ては仲間同士のけんかに発展し、寝台の上、床の上、あちらこちらで格闘がはじまる。

集団発狂というか、連鎖反応というか、群衆心理というか、殴り合い、かみつき合う。こうした狂乱状態は全満の各隊で期せずして起こったという。

「見てい給え、十年たてば、これも歴史の一ページにすぎないよ」とつぶやいたのは、同年兵の歴史学者宇野脩平であった。

翌日、兵器一切をソ連に引き渡し、全員、川向こうの野営地に集結したが、兵隊たちは昨夜の激情、興奮などケロリと忘れたように、解放された倉庫から我勝ちに新品の軍服や軍靴を持ち出した。

二、三日すると、付近一帯の草原に幕舎がぎっしりと並び、おびただしい日本兵が集められた。そして、気がついてみると、どこの隊からも将校は一人残らず姿を消し、幕舎長は曹長級で、准尉あたりが隊長をやっていた。

幕舎はたびたび移動させられ、その度に、内地への土産にと倉庫から持ち出した荷物を背負いこんで汗だくだく。延々長蛇の列は、ソ連兵の銃剣とダワイダワイの声に追われて夜も昼も引き回された。

最後の宿営地は沙河沿の川辺で、千人の大隊は多くの小隊に編成され、一たん隔離された将校、それも他隊の見知らぬ少尉や中尉が配属され、大隊長は遠藤大尉とかいった。これは上官の命令には絶対服従の日本兵の習性を利用したソ連の統御戦術であった。

私たちは乏しくなった食糧を補うために、遠く張りめぐらされたソ連の歩哨線を気にしながら、半熟の大豆やのびるをとって日を送ったが、夜となく昼となく、すきを見てはソ連兵が略奪にやってきた。奪った腕時計をいくつも巻いているソ連兵の中には、時計の見方を知らないのや、磁石と時計の区別がわからないやつもいた。

飢えと寒さとシラミのシベリアの旅

いよいよ十月八日、二四一大隊出発の日がきた。ソ連将校と並んで台上に現れた遠藤大尉が、感激の大声を張り上げて開口一番、

「今こそ、祖国に帰る！」と叫んだ。

ワーッと上がる歓声！

続いてソ連将校もニコニコ顔であいさつした。

「……今日の日を迎えられたことをお祝い申し上げる……」

茶番劇だった。何もかも巧みに仕組まれた大茶番劇だ。得々として我が大隊長が大見えを切ったその祖国とは、ソ国のことであったとは……。

正直者の日本兵たちは勇躍、列車に乗り込み、なお幾日間も帰還の旅とのみ信じ込んでいた。

夜が明けた。汽車はどうやら西に向かっているらしい。「やはり、ハルビン回りでウラジオストックへ向かうんだな」

ハルビンに近い新香坊で貨物列車に乗りかえを命ぜられた。十五トン貨車に四十人も詰め込まれると横にもなれないので、板切れを寄せ集めて二段式にした。外から扉をピンと閉めてガチャリと錠をかけられた。

夜がきて発車、汽車は猛烈なスピードで北へ北へと

突っ走っていく。間もなくごうごうたる音を立てて鉄橋にさしかかる。「松花江だ」、上段の小窓に取りついてのぞくと、皓々たる仲秋の名月にスンガリーの水は金波銀波も美しく、はるか下流は茫洋と煙る。

「やはりシベリア本線を迂回してウラジオへ出るんだな」だれかが弱々しくつぶやく。

夜が明ける。日が暮れる。列車は時々一望の平原に停車して、その辺の川から水を汲ませた。

停車するごとに、みんな下車して線路の両側に大小便の砲列をしく。そしてぐずぐずしていると、「ダワイ、ダワイ」と尻をけられて銃剣で車に追い上げられた。

歩哨の警戒がますます厳しくなり、停車中も扉をあけてくれないことがあって、便所のない貨車ではどうしようもない。

そこで、下車したときに拾っておいた犬釘で貨車の底板（厚さ二寸もあろう）をコツコツと突いて穴をあけ、共同便所とした。

車内のほとんどは下痢しているので、夜など、真っ暗な中を他人の腹の上、足の上を手探りで這って穴に近づき、用便の順番を待った。

列車が大興安嶺を過ぎる幾時間かの寒気は言葉に絶した。実に寒かった。冷たかった。

列車の最後尾の炊事車両から一日一回、四十人に対して一斗樽一杯の高粱飯が配給される日と、全然配給のない日があった。

明けても暮れても暗い貨車の旅。欠食の日は水筒の川水を飲み、ざらざらのなんば粉を生のまま口へ入れて飢えをしのいだ。ある日、「チタだ」とだれかが叫んだ。貨車の床の便所の穴から線路上の白い雪を見た。ポタリポタリ、血便と赤い小便の色！　〝チタの雪わが小便は血の如く〟

寝るといっても横になれない。ぎっしり詰まった暗い貨車の両側から足を交互に投げ出して、板壁にもたれて身動きはできなかった。足首からモゾモゾとシラミの侵入してくるのがよく分かるが、じっとしているより仕方がない。もう神に祈る気持ちも起こらない。自分だけ祈ってみたとてどうなるものか。目をつぶる

と故国の妻子の俤が浮かんでくるのみ……。

ある日のこと、

「オーイ、海がみえるぞう！」

「お、、日本海だ、バンザイ！」

よもや、と思う。もしかしたら？　列車が止まって「水くみ、出ろ！」の伝令……。お、海よ、と見たのは雄大なバイカル湖だったのである。岸辺には白樺の倒木がバラバラと白骨のように散らばっていた。

列車はそれから丸一日も湖岸に沿うて走った。さらに一日、二日、右も左も白皚々たる雪の山中を幾曲がりもして進む。

ある夕刻、とうとう私たちは装具をまとめて雪の中におり立った。二十日余りの苦しい、長い旅だった。その夜は線路傍の雪の中で、しかもなお霏々（ひひ）として降る雪。焚火を囲んで夜を明かした。

朝、外は大きな収容所の前だった。周囲は高い板塀とバリケードに囲まれていて、四隅に監視望楼があった。そして、人物とロシア文字が掲げられてあった。

その営門のアーチを潜ったとき、そこで展開されたのは、装具検査に名を騙る公然たる略奪だった。ソ連兵の飽くなき略奪は、その後、何一つ奪う物がなくなるまで続いた。

最初のラーゲル

第八ラーゲルはタイセットから五十三キロの地点にあった。ここは奥地のブラーツクに至るバム鉄道（バイカル・アムール）建設の労働力補給基地らしく、既に先着の日本人部隊多数が収容されていた。二重の鉄条網と高い板塀に囲まれ、要所要所の望楼には警戒兵が昼夜、厳重に監視していた。

私たちの幕舎の防寒用二重テントはすべて関東軍のものだった。内部は両側に棚をつくり、上下二段に分かれて寝たが、松の背板を適当に並べた隙間だらけの棚は、上段の者が動くとバラバラとごみが落ちてきた。時には隙間から毛布の端だの紐だのが垂れ下がって下段の者の顔をなでた。

ストーブが二個、そのためのまき取りに、赤松や白樺の密生した雪の山へ重い足を引きずりながら登ってゆき、雪の中に凍りついた倒木を防寒靴でけったり棒

でこじ起こしたりして、重いのは二人、三人でよろよろと担ぎ帰った。

十一月も半ばとなると気温は猛烈に低下し、朝な朝なの作業整列が苦痛だった。足を踏み、膝を叩き、寒気と戦いつつ待ちあぐむヤポンスキー（日本人）の所へ、長い外套にマンドリン（自動小銃）を抱えたソ連兵がやってきた。

「アジーン・ドヴァー・トリー（一・二・三）」と人員を数えるが、何遍繰り返しても勘定ができないやつがいる。四列に並ぶと暗算ができないのだ。「オーイ、五列に並んでやれや」

無学文盲、鉄砲の撃ち方だけしか知らないような、こんな監視兵を嘲笑しながら日本兵たちは、彼らの自動小銃に追い立てられて作業に出ていくのだった。

シベリアの冬は自然そのものがまるで牢獄のようだ。明けても暮れても灰色の空かちチラチラと粉雪が降った。さらさらとして、ちょうどアスピリンの結晶に似た粉雪は、風に吹きつけられると頬を刺すように痛かった。作業場で焚火をしても、焚火から十センチも離れると雪は全然溶けない。防寒帽のひさしが焦げるほど焚火に近づいてあたっているとしばらく暖気が感じられるが、今度は背中が氷を背負ったように冷えてくる。

十二月に入ると寒気は一段と厳しくなった。幕舎入口の二重扉のちょっとしたすき間からも、白い水蒸気がシューシューと槍のように噴き出して凍りついた。

日はいよいよ短くなり、朝、シベリア赤松の霧の中に太陽がボーッと輪郭を浮かび上がらせたら、もう十時は過ぎていた。その太陽が東南の空からやや西南の空に移ったと思うと、たちまち黄昏だ。

ついに、最初のマローズ（冬将軍）が来た。気温は零下五五度にも下がり、万物寂として声なく、それは死の静寂であった。

防寒服装に身を固め、パッと扉をあけ、一歩戸外に踏み出すや「ウッ！」とうなった。ドーンと胸に氷の刃を突き刺された感じで、よくも肺が凍らないものだと思った。戸外の作業など絶対に不可、もしも防寒帽を脱いで戸外に十分間立っていたら、脳が凍って死ぬ

だろう。鼻はたちまち白蠟のようになり、それをこすって赤味が戻らないうちに室内に入れば凍傷で崩れるのだ。

マローズの数日間、ストーブを囲んで防寒服を引っ被り、身を寄せ合って過ごすほかはなかった。

飢　え

正月、マローズの過ぎた後、私たちの一隊は雪中の徒歩行軍三日、奥地のラーゲルへ移動させられた。ここはタイセットから百二十九キロの三十一分所で、いよいよ本格的な飢えと、重労働のシベリア抑留極限の日々が繰り広げられるのである。

入ソ最初の冬の飢餓状態は言語に絶した。それは空腹だとかひもじいとかいうような生やさしいものではない。恒常的な飢餓状態の連続、兵隊は全員栄養失調症に陥っていた。

その上に恐ろしい寒気との戦い、重い防寒服装だけでも、わずかに残る体力を消耗させた。そんな状態でも一日の休みとてなく、私たちはよろめく足で雪を踏みながら、朝の暗がりから夕の暗がりまで伐採や除雪作業に追われた。

みんな不思議なほどよく転んだ。自分で足を上げているつもりでもつまずき、のめった。昨日も一人、今日も一人、次々と朽木のように倒れてゆく。みんな栄養失調死だ。朝、円匙を担いで営門を出て行く途中、バッタリ倒れた兵を分隊長が引き起こしたら、その兵は死んでいた。

何としても生き残りたい。生きて再び妻子の顔を見るまでは。食いたい、何でもよいから食いたい。寝ても覚めても、食物の幻影がちらついた。

来る日も来る日も衰えた体力をふりしぼって重労働を強制される兵隊に比べれば、軍刀がわりの白樺の杖をついて時折作業場を見回りに来る大隊長や将校は、腹ごなしに散歩する旦那のように見えた。

朝と昼はどろどろのなんば粉のめしを飯盒に三分か四分目、夕食は黒パンと薄いスープ、雪、雪、雪のバリケードの中では、その他に何を求められよう。なんば粉のめしを少しでも多くもらいたい一念から、飯盒の底を棒で小突いて外へふくらますことが流行した。

そんな中で底の平らな飯盒を持っている人は、そこまで成り下がれない人格者だ。

シベリアの収容所で展開された飢餓道地獄の様相は、人間がぎりぎりに追い詰められたらどうなるかという姿で、宗教も道徳も、しょせんなにがしかの余裕あってこその絵空事に過ぎないとさえ思えた。

カミのない国

永い間のソ連抑留中、私たちは一枚のちり紙も支給されたことはない。ちり紙なんて見たこともなかった。

雪をつかんで手ばなをかむことを覚えた。しかし、雪で尻をふくわけにはいかない。応急やむを得ず褌をちぎったり、しまいには褌をしている者もなくなった。防寒外套の裏をちぎったり、時にはセメントの袋紙を拾って、これを使ったら尻の穴がヒリヒリ痛んだ。私は、配給されるマホルカ（粉煙草）とボロ布と交換したり、一寸角のボロ布で一回ふいて、あとは雪で手をこすった。

マホルカは紙に巻いて二本ぐらいの量だったが、これを巻く紙がなく、私は入ソ以来これだけはと大切にポケットにしまって時々眺めた妻子の写真を眠っている間に盗まれてしまった。これはほぐして煙草の巻紙にされたのだ。

シラミ

飢餓と酷寒のその上に、絶えず悩まされたのはシラミだ。

着替えもせず、入浴もせず、しかも集団の雑魚寝とくれば、シラミの繁殖条件はそろっている。日本の乞食なら日向で裸になってシラミ取りができようが、シベリアの冬は、戸外で脱ぐことは自殺だ。夜は二百五十人の舎内にカンテラが一個ぶら下がっているだけで、シラミ取りなどできない。

襦袢といわず袴下といわず、縫い目という縫い目にズラリと巣くったシラミとその卵！　防寒服装で作業中にシラミが活動し始めたらもうお手上げだ。体をよじらせたり、外から叩いたり、特に胸骨の上の肉の薄い部分のかゆさは、もう気が狂いそうにかゆかった。

ソ連式入浴

そのうち入浴室がつくられて、ある夜順番が回って

きて、「何カ月ぶりの入浴か」とストーブで温めた脱衣室で裸になり、ブルブル震えながらお互いの体を見合ってハッと驚いた。

胸は肋骨も露わなくせに下腹部だけが異様にポコンとふくれ、疳虫の小児そっくり。尻肉はげっそりと落ち、中には尻の肉が全然?なくなって、肛門が逆に飛び出しているかのような者もいた。それから細い四肢！　これでは絵に見る地獄の餓鬼ではないか。

浴室といっても浴室があるわけではない。当番が配給する手桶一杯の湯で体を濡らし、洗い、しかも湯はこの一杯だけでおしまいだ。これがシベリアの入浴であった。

ああ、北極星

寒夜、小便に起き出ると、シベリア松のくろぐろとした林の上、頭上ほとんど間近に北極星が凍りつくような光を放っていた。

私は妻子の名を呼んだ。そのころはもう行住座臥、ただ、いとしい家族たちの名をまるで呪文のように唱えた。

「おばあちゃん、マキ、孝、加奈子、美貴、お父さんはシベリアで生きてるぞう」これが私の念仏であり、祈りの言葉であった。

重労働地獄

春の気配とともに収容所の動きが慌ただしくなった。果てしなく続く密林に挑んで、本格的な伐採作業が開始された。

原生林は赤松、落葉松、白樺が点綴(てんてい)していた。私たちは二人一組となり、長大な二人挽きノコギリを持って二抱え三抱えもあろう巨木に立ち向かった。

メーデーの休みが終わり、雪の消えた密林の伐採跡に延々たる鉄道路盤建設の土盛り作業の幕が切って落とされたのである。

ターチカと称する木製の手押車を使ってのこの強制労働のために、体力を消耗し尽くした同胞は次々と倒れていき、これをターチカ地獄として恐れた。気息奄々、ただ体力の限りを尽くして土に取り組み、掘っては積み、積んでは運ぶ果てしない単調な仕事、この作業には物すごい体力の消耗と絶望的に過酷なノルマの重圧

がある。

しかも、ソ連側はいやが上にも、あの手この手を使ってきた。不法にも、次々とノルマの大幅引き上げ。作業成績に対する増食、減食。これは一方から削った分を他方に与えるだけで、分隊としての総量は変わらないのだ。食物で釣って、一口でも余分に食いたい者をさらに働かせようというソ連の手口と、それに乗せられるヤポンスキーの愚直さ。

そして、犠牲者の続出を防ぐためか、体位検査が行われた。素っ裸になったヤポンスキーの尻の皮をつまんで一級、二級と決めてゆくだけで、廃牛の値踏みと同じである。

重労働のその上に、夏は物すごい「ぶよ」の大群に襲われた。小雨のようにシャーッと音を立てて襲いかかり、目も口もあけていられない。所嫌わず食いついた。重いターチカの舵棒を握る手は離せず、背中の破れに集まるぶよの襲撃！

「ああ、冬の方がましだ」と悲鳴を上げた。

むすび

入ソ以来、二年たってもまだ軍隊の階級制度は続いていた。私たち気力ある同志は起ち上がって、階級章を外し、民主的な選挙制実施を大隊本部に迫った。

それが実現すると決まった十一月初旬、私は四十七キロ地点の第七収容所の政治学校へ入学することになったが、在学一カ月、十二月十二日、政治将校ガンジコフの面接試問で退学追放されて、十九キロ地点の懲罰大隊へ送られた。

そして、厳寒の山で木材搬送作業中、この懲罰大隊の革新運動を呼びかけ、大衆の賛同を得て収容所の改革に成功した。それは入所二週間目の十二月二十五日であった。そのとき、懲罰隊に在所中の文学者高杉一郎氏と知り合った。現在も交流を続けさせていただいている。

翌年五月、私は帰還組に入り、一たんナホトカに到着、海を見たのもつかの間、逆送されて興凱湖南西の草原で軍用乾草づくりに従事すること三カ月。ナホトカへ向かって再出発、古ぼけた輸送船「信濃丸」に乗り込んだ。

ハッチに降りようとした途端、頭から白い粉をぶっかけられた。これはアメリカ軍が持ち込んだというＤＤＴの粉末であった。

出発して二日目の午後、ついに懐かしい祖国日本の陸地が見えた。船はやがて静かに舞鶴港にすべり込んだ。信濃丸の周りを小型ランチが走り回った。その船尾にはアメリカ国旗が翻っていた。

秋雨の　若狭の湾の　星条旗

一九四八年九月二十二日、私は生きて祖国に上陸し、一歩一歩、大地を踏みしめた。

わが青春

広島県　桑田四郎

○昭和十六年三月八日　十六歳。満州開拓青少年義勇軍に応募。

茨城県東茨城郡内原訓練所入所。第二十二中隊。（広島県郷土三個中隊の一つ。高瀬中隊第二小隊＝当時の加茂郡出身）

○昭和十六年四月二十九日　満州国北安省鉄驪県満州開拓青年義勇隊鉄驪訓練所入所。第二中隊

同年五月二日　農具舎係となり専従

同年五月　中学講義録（①正則中学校―現在の正則高校―出版部　②早稲田大学出版部）を取り寄せ、②を選び、これの送本手続（含講読金銭）を故郷（現在の豊田群安芸津町）の母に依頼。以後毎月二冊の送本、勉学

※1　正則と　早稲田をえらびて　講義録

中学を学びしは　青年開拓義勇隊

同年十月一日　収穫終了、農具舎係休止、根雪降り始め脱穀開始。衛兵勤務（中隊・訓練所本部）

同年十二月一日　訓練所本部経理部勤務を命ぜられ、事務担当。経理小隊では第二、三次訓練生と同居。

○昭和十九年三月　三カ年の訓練終了。第四次忠誠広高義勇隊開拓団（東安省虎林県忠誠村和平屯）入植

○昭和十九年六月　十九歳。徴兵検査、第一乙種合格